



千葉大学医学部同窓会報 第119号

題字 故 鈴木五郎 (大11卒 元るのほな同窓会長)

編集発行者
千葉大学医学部
るのほな同窓会報編集部
〒260-8670 千葉市中央区亥鼻1-8-1
千葉大学医学部内
るのほな同窓会
電話 (043) 222-7171 内線5026

千葉大学学長就任挨拶

磯野可一 (昭33卒)



私、本年3月31日をもって、40数年間外科医として育てていただきました千葉大学医学部を退職致しました。年齢、65歳とはいえ、まだ精神的にも肉体的にも自分自身としては第一線から離れる衰えを感じてはいませんが、月日は矢の如く過ぎ、人を待つてはくれません。

退官後の計画のないまま悠々自適の生活に入ることの一抹の寂しさと、毎日Sundayに対する家庭の騒擾さから、第二の人生のプランを考えるべく、一時の休みをとおりました。

私の医学部在任中、教授会の皆様方に色々と御迷惑をお掛けしながら、医学部・附属病院の改革委員長を仰せつかったことがきっかけだと思いますが、学長への立候補をと全員一致で推薦されました。皆様方の推薦もあり、家内の強烈な反対を押し切って立候補の決意を致しました。

しかし、いざ立候補して

みますと、亥鼻の地は西千葉、松戸とはあまりにも離れ過ぎていたことが痛切に感じられました。大学は広大な土地に、一体となることが大切だと思われませんが、不可能な条件が多々あります。今後は、情報システムの確立による一体化を、早急に実現することが大切だと思われました。

いずれに致しましても、私が学長に選ばれたのは、偏に医学部・附属病院の先生方の絶大なる御支援によるものと深く感謝致しております。そして、この時代に於ける学長の責任の重大さも痛感しております。

私が第二外科の教授に就任した時、附属病院の病院長に就任した時も、同じ様に「光栄と責任の重大さ」を述べました。しかし、この2つは医学・医療に関するものであり、これまで自分自身が研鑽して来た分野でもあったため、多少の自信がありました。又、育つて来た亥鼻の地に常住することの安堵さもありました。

しかし、此の度はその意味する所は極めて異なっており、新しい場所、医学・医療の他に、全く経験のない職務に携わることであり、

自分自身、やはり不安と孤独さを感じざるをえません。とはいえ、御支援いただきました皆様方の御期待に沿うべく、誠心誠意、千葉大学発展のために最善を尽くす決意であります。現在、多くの改革案が示されておりますが、いずれに致しま

東京るのほな会会長と千葉大学るのほな会副会長長辞任について

加納六郎 (昭20卒)

私も、今年3月中旬から体調を崩し、貫洞一夫、小幡裕裕先生のおすすめで、長沙病院で検査したところ、突然死寸前の左冠状動脈主幹部障害が見付かり、東京女子医科大学心研で4月22日にバイパス手術を受けました。5月中旬に退院予定のところ、CT検査で、骨を結んだワイヤが全部はずれて、心臓が肋骨に癒着していることが分かり、緊急再手術を5月13日に受けました。心臓剥離に7時間もかかり、赤裸の心臓を人工筋膜で包んで縫合し、6月13日にやっと退院しました。その後は順調に回復していますが、現在高血圧、全身の動脈硬化、骨の脆弱、昭和51年イラクのバグダッド空港での時限爆弾による両耳鼓膜、耳小骨、聴神経の損傷に加えて突発性難聴と加齢による強度の難聴があ

けたいと思っております。

東京るのほな会・支部長会議 開催される
会長 加納六郎先生から貫洞一夫先生へ (10月1日より)
るのほな同窓会報編集部、医学部渉外
委員会委員長との懇談会同時開催

9月29日(火) 午後6時より新宿のつばさ庵において、東京るのほな会の支部長会議が開催された。出席者は、東京るのほな会会長 加納六郎先生 (昭20)、副会長 貫洞一夫先生 (昭22)、中央支部長 小川源太郎先生 (昭27)、城東支部長 山上健次郎先生 (昭17)、城西支部長 小杉秀雄先生 (昭24)、城南支部長 田中光先生 (昭24)、城北支部長 大池和祐先生 (昭24)、三多摩支部長 関根博先生 (昭26)、勤務医部長 小幡裕先生 (昭28)、勤務医副部長 新田実男先生 (昭22)、大学病院支部長 鈴木英弘先生 (昭35)、準公立及法人個人支部長 内藤徹郎先生 (昭22) の諸先生方であった。会議では、会長・役員選任 (残任期間) の件などが話しあわれた。加納六郎会長の辞任願いが受理され、貫洞一夫先生の会長就任と小幡裕先生の副会長就任が承諾された。その他、東京女子医大教授である鈴木英

弘先生の医学部長就任のご報告などもあり、自由活潑な話し合いの場となった。

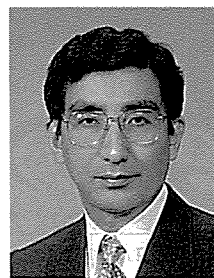
なお、今回は、井出源四郎るのほな同窓会会長のご助言と貫洞一夫先生のご紹介により、るのほな同窓会報編集部との懇談会も設置され、鈴木信夫 (昭47) 編集部長、古閑昭彦 (昭61) 編集委員が出席し、同窓会報編集部と東京るのほな会とのより緊密な連絡網の構築が約された。また、医学部渉外委員である栗山喬之教授 (昭43) もご参加していただき、医学部における渉外関連の最近の情勢が紹介された。医学部に渉外委員会のあることを初めて確認した諸先生方が多く、渉外に関する意見交流の場となった。来るべき21世紀に向けて若い同窓会員の育成を目指す、今後も協力関係を密にすることが確認され、盛会の中、夜9時に散会となった。

(鈴木信夫 記)

教授就任挨拶

千葉大学医学部小児科学講座

河野陽一(昭48卒)



平成10年6月1日付で新
美仁男教授の後任として、
小児科学講座を担当させて
戴くことになりました。

小児科学講座の創設は、
千葉医専時代の大正6年
(一九一七年)にさかのぼ
り、以来80年余りの長い歴
史の中で数多くの優秀な人
材が、当講座より輩出して
おります。このような伝統
のある小児科学講座を担当
させて戴くことは、大変に
光栄であるとともに、その
重責に身の引き締まる思い
であります。

私は、千葉大学医学部を
昭和48年に卒業し、直ちに
久保政次教授が主宰されて
いた小児科学教室へ入局し
ました。当時久保教授は、
小児気管支喘息を中心に小
児アレルギー疾患の病態の
解明と治療法の確立を目指
し、精力的に研究を進めて

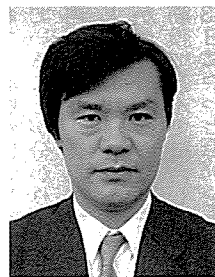
おられました。この久保教
授の教育を受けましたこと
が、私の小児科医としての
将来を方向付けたと言えま
す。2年間の小児科での研
修の後、環境疫学研究施設
免疫研究部多田富雄教授
(現東京理科大学生命科学
研究所長、東京医科歯科
大学難治疾患研究所人類遺
伝学部門笹月健彦教授(現
九州大学生体防御医学研究
所教授)、そして米国NIH
のJ.A.Brozsky博士の
下で免疫学を学び、昭和57
年に当時中島博徳教授が主
任を務められていた当小児
科学教室に戻りました。以
来、中島博徳教授および新
美仁男教授の下で、小児疾
患全般の診療に加えて免疫・
アレルギー疾患の診療と研
究に携わってまいりました。

分野が目覚ましい進歩を遂
げており、これに伴い小児
科学においても全般的な小児
科学の他に細分化した専門
小児科学の必要性が高まっ
てまいりました。当小児科
でも、内分泌、感染、代謝
血液、循環器、神経、免疫・
アレルギーの七つの研究班
が構成され、基礎的および
臨床的研究が行われること
もに、各研究班により専門
外来が持たれ、高レベルの
診療が行われております。
さらに最近では、分子生物学
の進歩により疾患の原因遺
伝子の同定と、疾患の根本
的治療としての遺伝子治療
が施行されるようになりま
した。このように疾患の発
症のメカニズムが遺伝子レ
ベルで解明されますと従来
の小児疾患のみならず成人
期における疾患についても
予防医学的見地から対応す
る必要があります。このような
小児医療の新たな分野にも
積極的に取り組むたいと考
えております。

また、千葉大学医学部は
その立地条件より、千葉県の
地域医療にも深く関わっ
ております。そこで、大学
病院と関連病院との連携の
もとに、関連病院の小児疾
患の各専門性の拡大と充実
をとおして、小児の全分野
の疾患に対応できる体制を
確立していきたいと存じま
す。未来ある小児の健康を
目指して、教職員一同と力
を合わせて邁進していく所
です。

千葉大学医学部病理学第一講座

張ヶ谷健一(慶応大昭47卒)



平成10年4月1日より千
葉大学医学部病理学第一講
座教授に就任いたしました。
千葉大学医学部病理学講座
の歴史は古く、明治23年
(一八九〇)に筒井秀二郎
先生が初代教授として着任
されました。先生はマウス
でタール発ガンを惹起し、
この業績は癌研究史上に不
滅のものとなっております。
以来百年余に渡り先輩方の
努力によって、研究業績・
学会活動においても、同窓・
教室員の数においても日本
有数の病理学教室に発展し
てきております。現在の二
講座制に移行したのは一九
二七年であり、病理学第一
講座教授は石橋松蔵教授よ
り数えて私が五代目の教授
であります。私にとってこ
の伝統ある病理学第一講座
を受け継ぐことは誠に光栄
であり、同時にその責任の
重大さを痛感する次第であ
ります。

病理学は疾病の本体を探
求する学問であると同時に
臨床医学の場では病変の確
定診断を下す重要な部門で
あります。現代医学は基礎
と臨床の垣根を越えて発展
してきており、病態の把握
診断、治療といった場面
でも基礎、臨床にまたがる知
識が必要とされ、病理学を
志すものはこれらを十分に
修得していなければならま
せん。また、現在の医学研
究は部門間で境界のない時
代に到達しており、病理診
断における病像、病変の解
釈も論理的に一般に受け入
れられる証明を出来るだけ
行うことが我々に課せられ
た課題であると考えており
ます。

私は一九七二年慶應義塾
大学医学部卒業、一九七六
年同大学院医学研究科を修
了し、同大学病理学助手、
講師を経て、一九八七年5
月より千葉大学医学部病理
学第一講座助教授として着
任しております。この間に、
一九七八年より一九八一年
まで米国ブルックヘイブン
国立研究所医学研究センター
visiting scientistとして留
学しております。これまで
の主要な研究課題は細胞増
殖・分化であり、とくに造
血幹細胞を対象とした研究
を細胞生物学的手法を用い
て行ってきたっております。病
理学第一講座は滝沢延次郎
井出源四郎、三万淳男教授
と伝統的に腫瘍学を研究テ
マとしており、私はこの伝
統を受け継ぎ研究を進めて
ゆく考えです。現在、剖検
外科病理一般を行いながら
細胞の腫瘍化とそれら腫瘍
細胞の増殖・浸潤・転移を
決定する分子群の役割を分
子レベルで解析しておりま
す。すべての研究がその独
創性を持つべく企画される
ことはもとより、また、こ
れらの成果を細胞・組織の
診断、治療への応用に向け
るべく教室員共々努力して
おります。

歴史と伝統を誇る千葉大
学医学部の一層の発展に尽
力できる機会を与えられ、
この上ない喜びを感じると
同時に、病理学第一講座の
大いなる飛躍に向けて努力
する所存です。今後、亥鼻
同窓会の皆様のご指導、ご
鞭撻のほど宜しくお願い申
上げます。

病院長就任のご挨拶

筑波大学附属病院長

深尾 立

(昭39卒)



この4月に筑波大学副学
長となられた長谷川鎮雄病
院長(千葉大35年卒)の後
任として私が病院長を拝命
いたしました。長谷川病院
長の下で2年間副院長を務
めさせて頂きましたので比
較的早く院長職に慣れつつ
あります。筑波大学では附
属病院運営に関する最高責
任者は医療担当副学長であ
り、病院に通曉されている長
谷川先生がその任にあたら
れているのは有難いことで
す。また副院長2名のうち
の1名が昭和42年卒の能
勢忠男脳神経外科教授で、
主に病棟運営担当として私

を支えてくれています。能勢先生は永年病院や臨床医学系の運営に幹部として携わってこられたのできわめて頼りになり、私よりもずっと院長らしい風格があるとの評判です。本院は後述のPCC方式に代表されるように看護部の力がきわめて強いのですが、赤沢陽子看護部長は千葉大学高等看護専門学校出身で学生時代からの付き合いですので助かります。

筑波大学附属病院はその名の通り、医学部附属ではなく大学附属の病院というところに特色があります。

したがって、病院で診療や研究を行いたい人は、医師も含めて全ての教官が病院利用願いを出して病院を使うという形をとっています。医学の教官に病院利用願いを出さずとはなにごとぞと怒る人もいますし、自分は病院職員ではないと誤認する人もでてきますが、それでも全診療グループがより良い病院にむけて一生懸命に努力しています。

最近国家財政の悪化と行政改革を反映し、国立研究機関の独立法人化が話題となっています。国立大学病院もその検討対象となりそうです。したがって国立大学病院にあっては最大の問題は病院経営です。先日は国立大学病院でも史上初め

て一般企業と同様の職員一人当たりの収益とか設備の収益など、詳細な経営管理指標や財務関係諸表を国に提出させられました。

経営健全化の第一歩は、保険診療を熟知してないと日本では医療ができないことを教授以下の医師に納得させることで、各病院長は苦勞しているようです。今頃そんなことを言っているのかと私立大学の先生方には笑われるような話ですが、かくいう私も副院長時代に初めて保険点数早見表を精読したくらいです。

そうした課題をはじめ国立大学病院に降りかかる様々な問題の解決を、全国レベルでまとめて常時検討しているのが国立大学病院長会議常置委員会であり、その委員長は代々千葉大学医学部附属病院長が務めることになっているそうです。先日全国国立大学病院長会議が甲府でありましたが、主な議題は、病院経営改善、保険診療、情報開示、薬剤

治療に関する新GCP (good clinical practice) 対策、病院長のリーダーシップ、卒後研修義務化、患者本位の医療推進などでした。ここでは、常置委員会委員長として山浦晶千葉大学病院長が、全ての議案に常置委員会の検討結果を述べ

られたり、総括コメントをされたりと大活躍でした。また主催校である山梨医科大学の塚原重雄病院長(36卒)が会議の議長を務められ、富山医科薬科大学の片山喬病院長(30卒)が活発に発言されていました。なお、この会議にあわせて筑波大学が世話人校を務めた国立15大学(いわゆる国立新設医大)病院長会議が開かれましたが、塚原先生に会場設定など全てを準備していただきました。この紙面をお借りして厚く御礼申し上げます。

さて、筑波大学附属病院は、6年一貫レジデント制1患者1診療録、診療録・患者資料中央集中管理、主として臓器別の診療グループ制、PCC方式 (progressive patient care)、診療コンサルテーション方式による1患者に対する多診療グループの総合診療など、他の大学病院とはかなり異なった運営を創立以来行ってきました。

本院のような診療科制度は最近東大や京大など大学院大学になったところが採用していますし、千葉大学も検討中とか聞いています。PCC方式とは、看護上の重症度によって患者を分けて、それぞれに対応した数の看護要員を配置した軽症、

中症、重症の各病棟でケアをするシステムです。したがって基本的に外科病棟とか内科病棟というものはありません。重症度を決めるのは看護部ということになります。付き添いをつけずに少ない要員で看護を行うために採用された方式です。

上記のような独特なシステムにより、本院は講座制の大学病院よりも患者のニーズにあった医療を提供できてきたと自負しています。また、良質な若い医師をはじめコメディカルの育成にも成功してきたと思います。

しかし当初は斬新なシステムも全ての設備建物同様古びてきました。利点欠点も明らかになってきたこともあり、時代に合わせてより優れたシステムに改善してゆかねばなりません。

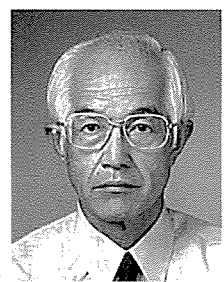
このような筑波大学が茨城県の医療水準の向上にかなり貢献してきたとは思いますが、茨城県医療界における筑波大学の力は千葉県における一〇〇年の歴史を持つ千葉大学とは比較にならない微弱なものです。かつては茨城県内に多くののりなな会員がおられ、私どもは随分助けて頂いてまいりました。そのようなこともあったためか本学の千葉大学出身者は、まず茨城県医療の充実をモットーとして

きました。今後は地域の医療機関とのつながりを、病院として組織的に強めてゆく必要があります。地域の医療機関との協力、数多くの高度先進医療(恥ずかしいことに現在ひとつも高度先進医療の指定を受けていません)、全職員の和と活力、それらを基盤として患者のニーズにあったさらに良質の医療を提供することを目指してゆきたいと考えています。

本学の教授もそろそろ第3世代に入り始めほとんど若返っています。本年4月には膠原病・リウマチ・アレルギー科に54卒の住田孝之教授が着任され、周囲の環境をどんどん斬新なものに変えておられます。このような若い力が病院運営にも生かされるようになるかと思うと心楽しいものがあります。なお最近の病院の人事異動では、54卒卒の高田彰医療情報部講師が昨年助教兼部長に昇任し、51卒卒の大塚雅昭消化器外科講師が手術部助教兼副部長に昇任しています。

筑波大学卒業生が育ってくるにいたが本学の千葉大学出身者は少なくなってきましたが、今後とも筑波大学における同窓の活躍にお力添えを頂きたいと願っております。

きました。今後は地域の医療機関とのつながりを、病院として組織的に強めてゆく必要があります。地域の医療機関との協力、数多くの高度先進医療(恥ずかしいことに現在ひとつも高度先進医療の指定を受けていません)、全職員の和と活力、それらを基盤として患者のニーズにあったさらに良質の医療を提供することを目指してゆきたいと考えています。



千葉大学教育学部養護教諭養成課程
末吉 貴爾(昭36卒)

平成10年4月1日付けで武田敏教授(昭33)の後任として、千葉大学教育学部養護教諭養成課程の教授を拝命しました。私が担当することになりました養護教諭養成課程は、現代社会の歪みから生まれた、いじめ、不登校を初めとする色々な問題から、養護教諭に対する期待が高まり、今回は千葉大学でも、養護教諭部門の修士課程大学院が設立されようとしています。

私は昭和36年に医学部を卒業後、1年間のインターンを経て、松本胖教授の主催する神経精神科大学院に入学しました。大学院の4年間は神経精神医学の臨床研修と、小泉準三筑波大学前精神科教授のご指導の下で電子顕微鏡による小脳の超微細構造の研究を行いました。

昭和41年4月に千葉労災病院神経科の清水良平先生の下に赴任し、5年間勤務

しました。その間44年度には、関西医科大学脳神経外科の景山直樹教授の下で研修しました。景山教授から教えを受けた脳神経外科学は、その後の臨床に役立ったばかりか、この間多くの関西の脳神経外科医と親交を深めることができました。46年2月に、新設された千葉大学脳神経外科学講座に助手として赴任しました。翌47年4月、千葉県がんセンター準備事務所に主幹として赴任し、がんセンターの設立に努めました。当時は千葉大学自身に脳神経外科講座ができたばかりで、千葉県も脳神経外科に対する理解が不十分で、検査機器購入にも苦勞したことが思い起こされます。同年11月ががんセンター開院してから22年間脳神経外科部長として、脳腫瘍の治療に努力して来ました。

これからは短い期間ですが、医学部の諸先生のご援助を戴いて、養護教諭の養成に専心努力を致すつもりであります。皆様のご指導、ご鞭撻をお願い致します。

高知医科大学副学長に就任して

小越 章平 (昭36卒)



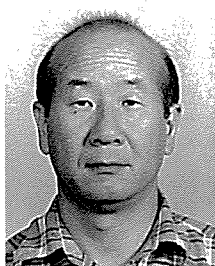
本年4月10日付けをもって教育研究等担当の副学長に就任しました。本学様の国立単科医科大学では、全国的に私の様な学部担当に相当するものと、病院長兼務の副学長と二人副学長制を開学以来とっています。ともに学長推薦で決まるわけですが、今回、2月に学長選挙があり、池田久男新学長(岡山大学31年卒・神経精神科)に決定後、間もなく呼ばれて副学長就任を要請された時は、まさに「晴天の霹靂」でした。中山外科同門の故田宮達男前教授と共に、病院開設と同時に本学第二外科助教授として11年間、その後田宮先生の後を継いで教授としては僅か5年間でした。外科教授としては、定年まで3年を残すだけとなってしまったので、夫婦間の会話も自然退官後の話題が多くなり、この話を頂いた時、即答は出来なかったのが本当のと

ころです。本学では、副学長は専任指定職で外科教授との併任は出来ません。しかし後任が決定するまでは兼務を許されています。新設と言っても本年秋には、開学20周年の祝賀会が予定されています。そろそろ新設という冠を外していこうと言われてます。病院の方ならば、長年の臨床経験でやる事の大筋は見当がつきますが、学部のほうは、今まで基礎の先生が担当していたので判らない事だらけです。とくに本学では、本年から医学部に4年制の看護学科が併設されたために医学科々長、看護学科々長が誕生しました。学長、両副学長は両学科(医学部)を総括する形になります。そのような体制作りはかなり時間を要しましたので、後任教授の選考委員会の発足が遅くなりました。とにかく、私の仕事領域の広い事に先ず戸惑ってます。学部の入学から始まって、教育カリキュラム、学生の厚生補導等、最近の学生のいざこざも何かを言われて傷ついたとか、昔の中学生レベルの喧嘩に對しても親が口を出してき

たり、身体ばかり大きくても精神的には思春期といった学生の多いこと。課外活動、留学生の事など医学科、看護学科ともにやらねばなりません。大学院もメリックがはつきりしないためか、また旧帝大の大学院大学の発足の為、最近慢性的定員割れを起こしている状態です。開学一周年の一〇〇％合格で始まった医師国家試験成績も最近芳しくありません。副学長に就任して

北里大学医学部免疫学

教授 篠原 信賢(昭45卒)



ヒトは生物学的には紛れもなくサル的一种である。然し乍ら生まれ持った好奇心と観察・帰納・演繹への衝動によりヒトは全く新しい生存手段を獲得し他と決定的に異なる存在となつてしまった。他の全ての生物の栄枯盛衰はほぼ全面的に環境に依り決定されており刻々と変化する環境も自ずから大局的なバランスが保たれて来た。しかしながらヒトの採った新しい生存戦

数ヶ月が過ぎたばかりですが、早急に対策を立てねばならない事は山積しています。「忙しくなって大変でしょう」とよく聞かれますが、40年近い外科医生活とは違つたストレスを楽しんでいます。最近大学独自のやり方が盛んに問われていますので、「小粒でもピリリと辛い」医大の成人後の方向づけに微力を尽くしたいと毎日奮闘しています。

略は地球上の限られた環境の大局的な平和に対する深刻な挑戦とならざるを得ず、特に産業革命以降の人間活動の爆発的な拡大により既にこの危険性が誰の目にも明らかになって来ている。この危険性を避けるために人間の知的活動を止めさせることは人間が絶えない限り不可能であろう。人類はやはり知性により宇宙及び人間自身に対する多面的な理解と洞察を深めそこから自分たちの活動を見直し制御し対策を講じる事を果てしなく続けてゆく以外に無いだろう。無限の次元を持つ宇宙の森羅万象を少しでも理解しようと挑戦するな

らば出来る限り時代の制約、保守性から解放された発想が必須である。私は大学の本質的な存在意義はまさにこの思想活動を中心的に支える環境を保つ事にありと考えている。

医学は目的指向性の強い思想体系であり、また医学部は専門教育機関としての社会的責任を負わされている。しかしながら医学の大きな部分が生物学であることも事実であり人体という宇宙への挑戦は終わることの無い努力と無限の自由な発想を必要とする。臨床医は患者が現代医学で把握出来る問題の背後にとつてもなく多様な未知の問題を背負っていることを日々感じている筈である。卒業して10年も経つと学生時代に学んだ一見完成された概念・考え方が次々と修正されたり捨てられたり又全く新しい概念が出てくる事を体験するだろう。これは分子・遺伝子まで扱えるようになった医・生物学にとつても一寸先が闇である事を端的に物語っている。臨床医は常にその時代の最新のコンセンサスから判断して最良の方策を採るべく努力を続けることが要求される。卒業後教育が充実しても医学学生は大学で学んだことを卒業自

らの努力と才覚で柔軟に修飾し新しい概念を吸収し続け、また時には新たな概念を作って行く役割も担わなければならない。これには大変な努力と知力が必要とされる。基礎医学教育は医学部の基礎知識を伝えるだけでなく柔軟さを支える論理的思考と自己検定の習慣を身につけさせることも重要な任務である。実際にどのような材料を医学生に伝えるかは簡単ではない。しかしながら私としては実

筑波大学臨床医学系内科

教授 住田 孝之(昭54卒)



平成10年4月1日付けで筑波大学臨床医学系内科に教授として就任いたしました。内科は8つのグループから構成されておりますが、その中の膠原病リウマチアレルギーグループを担当いたしております。

私は昭和54年に千葉大学医学部を卒業後、膠原病などの自己免疫病の臨床を行うために、第二内科(熊谷

際に学生と接しながらやり方を模索して行きたいと思つている。私の持ち場である免疫学は十数年前に分子生物学的手法が取り入れられてから物質的側面での知識の進展に著しいものがあり、信頼に足る有効な知識が積み上げられてきている。まだ病気を説明する実力を持つに至ってはいないが臨床において病気を理解しようとする際に大きな助けになるであろう材料を医学生に伝える事はできると思つている。

朗(元教授)に入局し、大学、旭中央病院で内科研修を行いました。その後、免疫学を学ぶために、千葉大学医学部環境疫学研究施設免疫研究部(谷口克教授)の大学院へ進み、日本學術振興会特別研究員の一期生を経た後、西ドイツ国ケルン大学遺伝学研究所(Klaus Rajewsky教授)で発生工学、分子生物学を学びました。平成元年1月からは再び千葉大学第二内科(吉田尚 前教授)に入局し、富岡玖夫先生(現東邦大学医学部佐倉病院内科教授)、小池隆夫先生(現

北海道大医学部第二内科教授、岩本逸夫先生の御指導のもと、アレルギー免疫グループにおいて、慢性関節リウマチ、膠原病の診療と自己免疫発症の分子機構について研究を進めて参りました。平成7年5月からは聖マリアンナ医科大学難病治療研究センター（西岡久寿樹教授）でさらなる研究を続けて参りました。

このように、国立、私立、臨床、基礎と渡り歩き、多くの素晴らしい師に巡り会え、広い世界を知ることができました。このことが、結果として、私の大きな財産となっております。

この度赴任いたしました筑波大学は、全国80医学部のなかで唯一講座制をとらないユニークな大学であります。講座制でないために、医局が無く、一つのグループのメンバーがバラバラに散らばっております。そのため、断片的な数多くの委員会が統制されていますが、グループとして活動するには不合理と思われまます。そこで、医局に準じるステーション構想というものが将来的にかかげられております。着任当初、医局で育った私にとっては、このシステムがなじみのないものでしたので、慣れるまでに

多少時間がかかりました。筑波大学は建学当初から千葉大学の諸先輩が数多く活躍されているところで、なのはなの先輩、同僚に大変温かいご指導を頂いております。

筑波大学の長所は、共通機械、共通機器室が充実していることや、講座制のよくな垣根が無いため他科や他のグループとの交流が容易であることでしょうか？

ですから、やる気があって、多少のランニングコストがあり、ヒトがいれば何でもできます。さらに、医科学研究科（修士課程）、医学研究科（博士課程）があるため、MDばかりでなくPhDの学生にも門戸が開かれた大学であります。短所としては、助手というポジションがなく無給医局員もいないため、マンパワーの面で制限があることだと思います。

私が目指すものは、『サイエンスに基づく内科学』であります。対象としている疾患は自己免疫病であり、その代表的な疾患としては慢性関節リウマチや膠原病で、全国に約一〇〇万人の患者さんがおり、さらに、一九九六年秋にリウマチ科が標榜科として認められたため社会的にも注目されて

いる病気でありまます。近年の免疫学、分子生物学の進歩により、このような自己免疫病の病因の解析や特異的治療、遺伝子治療が期待される時代となってきました。自己免疫病の研究、診療を共通項として若い学際的な専門医を育成して参り

船橋市立医療センター

院長 佐藤裕俊（昭38卒）



平成10年4月1日付けで同窓の皆様方の御支援を得て船橋市立医療センター院長を拝命致しました。当院の歴史は浅く開院は昭和58年10月であります。設立の経緯は昭和40年代の後半の船橋市は人口急増に伴い患者の受け入れ病院の不足が深刻な状況でした。これを解決するために公立病院建設構想が持ち上り、市行政と医師会で10年の歳月をかけて見当され、58年10月開院の運びとなりました。従って病院運営の基本方針は市医師会の意向をかなり受け入れたものとなりました。すなわち①24時間体制の救

急医療をおこなうこと。②高度医療に重点を置くこと。③市医師会に開かれた開放型病院にすることなどあります。私も開院前から副院長として病院開設に参画しシステム作りや医療機器の選定、医師会との折衝など貴重な生みの苦しみを体験しました。開院時は206床、9診療科で開始しました。数ヶ月を経ずして超満床状態となり増床は絶対に必要な状況となつてしまいました。しかし63年の医療法の改正で一般病床の増床は認められず特殊疾患病床（がん・循環器・救急）として平成2年7月に一七五床が認可されました。その後4年に25床、7年に20床の増床認可を得て新棟の竣工とともに220床の増床が完了し現在の426床の病院となりました。診療科も循環器科、

呼吸器外科、心臓血管外科、放射線科、麻酔科を新設し14科となりました。また同時に10年間の救急医療の実績が認められ東葛南部医療圏（一五〇万人）唯一の3次救命救急センターの指定を受け、これを併設しました。そして平成8年4月には臨床研修病院の認可を得るため、更に精神科、皮膚科、形成外科を増設し現在の17診療科となり、ほぼ完結的な地域医療がおこなえる体制になりました。平成9年4月には臨床研修病院の指定を受け、10年5月から研修医を受け入れて卒後教育に努めております。次に病院職員についてですが常勤職員は五二一名でその内訳は医師八四名、看護婦三二六名、臨床検査技師三名、放射線技師十八名、薬剤師十三名、その他四十七名であります。この他に医療事務、物流センター、院内清掃、給食警備など外部委託要員が六十名以上おり毎日六〇〇名近い人が働いています。医師派遣大学は千葉大が一番多く次いで東京医大、東京医歯大、福島医大、昭和医大、慈恵医大などで多岐に渡っておりますが各科相互の連携も良く、切磋琢磨しながら働いてもらっています。看護婦

の充足率も隣接地に船橋市立看護専門学校が開設されたお陰で一時的な看護婦不足は解消しました。

次に設備について述べます。まずコンピュータオーダリングシステムは全部署で採用し稼働しています。外来・病棟からのオーダーは薬剤部、放射線科、中検給食、医事課へ瞬時にして正確に伝えられ省力化、待ち時間の短縮、正確な診療報酬の請求に役立っています。外来カルテの収納には2万4千冊収納可能なシングルピッカーを設置し瞬時に引き出せます。血管撮影装置（2台）、CT（2台）、リニアック、MRI、ハイパーサーミアなどもフル稼働しています。また患者の診療状況については外来患者数は一日約九〇〇人と病院の規模からすると少ないです。入院患者の病床稼働率は93〜95%と高く、在院日数も17日と短いのですが内科、外科の入院待ち期間が3週間以上となりベッドコントロールに苦慮しています。

最後に今後の病院運営の基本方針を述べさせていただきます。①全国的にもその成果が注目の的となっているドクターカーの運用を伴う3次救命救急センター

は迅速にして、より効率的な患者受け入れをはかり救命率の向上をはかる。②開放型病床の運営は船橋方式として全国的にも採用されているところですが今後共医師会会員の生涯教育の場として育てていく。③病診連携のもとに診療所と病院の機能の分担を明確にし高度医療（がん・循環器・脳・肺疾患等）に主眼を置いた効率的な医療をおこなう。

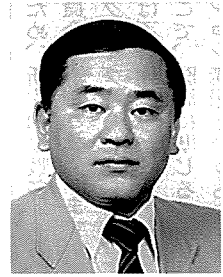
④臨床研修病院として医師の卒後基礎教育の充実をはかる。⑤診療情報の集積と整理をおこなうなどでありまます。21世紀の少子高齢社会に向けて高度で良質な医療サービスが提供出来るシステム作りをおこない、地域医療に貢献してまいります。今後共、同窓の皆様方の温かい御指導、御鞭撻をお願い申し上げます。（第2外科非常勤講師）



東京都立保健科学大学・神経内科学(学科目制)

教授 栃木 捷一郎

(北大昭44卒、千大院昭56卒)



文部省の大学院大学構想に基づき、その端緒としての調査費が北大・東大・京大の三大学を対象に予算化されて以来、10余年の歳月が流れました。

旧制帝国大学が大学院大学へと改組転換されつつある潮流の中で、大学院重点化政策の一環として千葉大学大学院医学研究科におきましても独立専攻の大講座が導入され、学部諸講座との相互協力が体系化されつつありますのは誠に同慶の至りでございます。

東京都立保健科学大学が平成9年12月に認可され、東京慈恵会理事・米本恭三氏を官選による学長としてお迎えし同10年4月に開講の運びとなりました。

本学は都内唯一の保健医療系の総合大学であり、医療技術者のリーダーを育成すると同時に医療機関・医療現場との交流ならびに共

存・発展を願望する教育・研究施設でございます。

地方公共団体として世界最大の行政機構とオーストラリア・一国に相当する予算規模を有する東京都は衛生・福祉行政の事業として、またアカデミズムの実践から神経・松沢・駒込・豊島他都立病院、老人医療センターにおける医療、更に神経科学・精神医学・臨床医学・老人(高齢者)等総合研究所での研究活動を国に先取りしてと喻えられ、程までに亢めて参りました。

嘗て医科大学新設ラッシュの時代に故・美濃部亮吉氏・都政下で現・東京都老人医療センターを改組して都立大学医学部へ転換する試案が検討されたと同っておりです。しかし都知事のブレインであった当時の東大医学部長・白木博次教授殿他から、都内に大学本部を拠く医療機関が13個所存在するなどの理由により、むしろ医療技術者養成のための総合大学開設を策定すべきであるというご答申を受け今日に至ったわけでございます。

本学は看護・理学療法・

作業療法・放射線の4学科により構成され東京都立駒込病院が実習における最重要施設とされております。

現在、大学院博士課程設置までを如何に展望し構築してゆくかが最大の課題となっております。

私は昭和44年に北大医学部を卒業後、大学混迷の時代に貴学43・44年卒の諸先生と自主研修にて一緒に過ごして頂きました。最初のオーベンとして増田善昭教授殿から懇切なご教示を頂きました頃が、つい先日の如く鮮明に想い出されます。

46年度から就任間もない、名誉教授・奥田邦雄先生より第一内科入局を許され、学位記授与までご指導賜りました。53年から脳機能研究施設の診療部門が発足し、同・平山恵造先生の医局へ移籍させて頂きました。

その後間もなく前・東京女子医科大学消化器病センター長・小幡裕先生からお声をかけて頂き東京都立豊島病院(神経)内科医長として入都(出向)したわけでございます。

昨年米寿をお迎え遊ばされました元三葉病院長・名尾良憲先生には豊島病院OBとして折にふれご薫陶賜り身に余る光栄でございます。その後、前身の東京

都立医療技術短期大学図書館長(教授)を経て本学開学に至るまで東京都へ奉職申し上げております。

開講に至るまでには千葉大学医学部教授会OBでいらっしゃる前学長・有水昇殿のご尽力ならびに駒込病院長・吉田尚先生のご支援が推進の多大な原動力として一翼を担って下さったことを特筆させて頂きます。

私は学位記授与まで賜りました千葉大学と北海道大学を日頃から二つの母校として大変誇りに感じております。共に国内では東大医学部教授育成は国より、海外の一流大学教授をも多く輩出しております。

東大名譽教授・多田富雄先生のIGE他のご研究同様、γ型インターフェロン(ウィルス抑制因子)について最初に報告された長野泰一・東大名譽教授のご業績はノーベル賞以上のものかも知れません。

また、加藤巖先生が東大医学研究所教授ご任期満了の頃に微生物学第二の教授としてゐるのはなキャンパスへお招き頂きましたのは大変な光栄と存じております。

貴学内の母教室では内科学第一、神経内科学のそれぞれの講座におきまして税所宏光教授殿ならびに服部

孝道教授殿の両先生が、すばらしい素質に恵まれた貴学卒業生皆様を秀れた専門医あるいは研究者としてご養成・発展させていらっしゃるの慶ばしい限りでございます。

私も入都後10余年に亘り渡邊晴雄名誉教授殿ならびに故・伊東亨教授殿と前田徳尚理事長殿のお招きにより東京女子医科大学と聖マリアンナ医科大学の兼任をお命じ頂いて参りました。

医学教育・研究・診療の側面からお手伝いをさせて頂いております。これら二つの私学も最近では東大・京大に優る国家試験合格率を獲得するようになった。

名門・千葉大学医学部の卓越した国試合格率には、例年尊敬に値するものがございます。

日頃、医療技術者養成と医師育成とが良い意味でお互いにフィードバックし合い教育・研究・医療それぞれの分野で新たな発展を遂げてくれれば幸甚であると念じております。

末筆ながら元学長・井出源四郎先生はじめのほな同窓会諸先生の今後益々なるご健勝とご発展を祈念致しますと同時に、委員長・鈴木信夫先生ならびに編集部皆様へ衷心より感謝申し上げます。

千葉県循環器病センター

センター長 龍野 勝彦 (昭42卒)



中村常太郎先生(昭和32年卒)の後を受けて平成10年4月1日より千葉県循環器病センターのセンター長を拝命いたしました。私はインターン終了後、昭和43年に東京女子医大日本心臓血圧研究所外科に入所、故神原任教授の門下で10年間心臓外科学を勉強いたしました。昭和52年8月、開院前の(神原記念病院)に移って開設準備に専念したあと、平成9年6月まで約20年間、心臓血管外科部長、後に副院長として循環器専門病院の立ち上がりからその成長課程をつぶさに見てまいりました。

平成9年7月、中村前センター長、谷口千葉大学医学部長、中島第一外科教授、守屋整形外科教授、佐柳前県衛生部長のご推挙により、設立準備室担当の県衛生部技監として30年ぶりに千葉に帰ってまいりました。一生に2度も循環器病院の創

設に関わる幸運を与えられましたことを心から感謝し、もとより浅学非才の身ですが、これまでの経験を生かしてこのセンターの基盤をできるだけ早く固めるよう努力してまいりたいと思っております。

循環器病センターは中村先生の長年のご努力により、平成10年2月1日、県立鶴舞病院を発展的に解消して開院いたしました。敷地は6・2ヘクタール、新しい建物は旧鶴舞病院に隣接しており、地上6階、地下1階、総床面積二、一〇〇〇㎡です。当センターは循環器が専門ですが、鶴舞病院が過去40年間担ってきた地域医療も合わせて行っております。したがって診療科目は循環器内科、心臓血管外科、神経内科、脳神経外科のほかに、内科、外科、小児科、整形外科、呼吸器科、麻酔科など全部で15科を有しています。ベッド数は合計二二〇床、心臓、脳神経系がまとめて二二〇床、一般診療科が80床、ICU、CCUがそれぞれ10床ずつです。このほかに手術室が5室、心臓血管カテーテル

室が3室あります。医師は現在増員中で、平成10年度末には51名になる見込みです。

さらに今後、鶴舞病院の跡地に一〇床の第2新館を建設し、そこに一般診療科棟やリハビリテーション施設、災害時基幹医療センターとしての諸設備、さらに教育病院として学生や研修医の受け入れ態勢も整えていく予定です。

循環器病センターの目標は千葉県における循環器医療の中心的施設として、心臓・大血管・脳血管疾患などに対する診断、手術、カテーテル治療や県内唯一のガンマナイフによる非観血的治療をはじめ、救急医療、リハビリテーションなどを行う総合的な循環器病センターを目指しております。

同時にセンターでは今後、循環器病に対する臨床研究

産業医科大学医学部寄生虫学・熱帯医学講座

教授 金澤 保(昭53卒)



平成10年6月1日付けで産業医科大学医学部寄生虫学・熱帯医学講座を担当さ

や教育を盛んにして、高いレベルの先進医療技術の開発やその普及も行っていくつもりです。このため組織の要は人と考え、目下、優秀な医師の確保に全力を注いでいるところです。

鶴舞は千葉市から車で約1時間、地元では「市原の軽井沢」と呼ばれるほど自然環境に恵まれた所です。都会の雑踏を離れ、ゆっく

りものを考えるには絶好の場所といえます。嘗て昭和40年代に心臓手術見学のために全国から循環器科医が鶴舞詣をしたことがありました。それから四半世紀を経た今、再び若い臨床家達が最先端医療を求めて千葉循環器病センターを目指して集まってくる、そんな夢を思い描きながらこのセンターの基本的な態勢作り

に励んでいる毎日です。

地理的な要因もありご存じない方も多いかと思ひますので簡単に当大学の紹介をさせて頂きます。当大学は産業医の養成、産業医学の研究を目的として昭和53年に北九州市内に設立された私立大学です。私立大学ではありますが労働省との関係が深く、大学の経営、運営には他の私立大学とは異なる面をもっております。

北九州市西北にある広大な敷地に赤レンガで外装された建物が点在しております。大学構内には山や池があり学生にとりましても教職員にとりましても非常に恵まれた環境です。本学の大きな特徴の一つとして産業医学マインドを持った医師を養成する目的で学生に対する講義の中に産業医現場実習等の産業医学関連の授業が組み込まれております。

また卒業後9年間を産業医学関連の職場に勤務すれば在学中の授業料が全額免除されるという制度があります。特定の分野で活躍する医師を養成することを目的としているという点で自治医科大学や防衛医科大学校と似ております。

私は昭和53年に卒業後、当時平山恵三教授が主宰しておりました神経内科学教室に入局させて頂きました。

しかし以前より興味を抱いておりました寄生虫学への「憧憬」を去り難く故横川宗雄教授の門を叩き大学院生として暖かく迎えて頂きました。横川先生の最後の弟子として寄生虫学を学べたことを非常な幸福であつたと思っております。その後国立予防衛生研究所(現国立感染症研究所)に移り研究生活を続けて参りました。千葉大在学時から研修医、大学院、さらに国立感

染症研究所在職期を通じて多くの先生方から大変なお世話を頂きましたことに心より感謝致します。

今まで行って参りました研究は肺吸虫症、住血吸虫症およびエキノコックス症の疫学、感染防御機構、臨床寄生虫学等です。今後はさらに国際医療、国際保健といった視点から産業医学

との関連を考えつつ教育、研究に携わって参る所存です。寄生虫学は国内ではややもすると存在価値を認められない学問でありまして。しかし昨今感染症の復活が危惧され始めました。またひとたび海外に目を転じますと寄生虫学的な問題が山積しております。微力ながらこの分野に少しでも貢献できますよう努力して参る所存です。

勝山寮開寮70周年

安房郡鋸南町にある勝山寮に今年5人の学生が寮委員として加わり、8月に2週間開寮することになった。勝山寮では以前からヨット、ウィンドサーフィンが盛んだが、今年は、新規にディンギーを二艇購入した。館山道の木更津までの開通により勝山までの交通の便

が良くなり、今年度中にできる最寄りの岩勝インター(仮称)を利用すれば、千葉市からは一時間以内で行くことができる。勝山寮は夏のリゾート地としてだけでなく、通年型の宿泊施設としての利用が期待でき

る。

開寮式は8月1日(土)

午後六時から行われた。顧問の藤村教授(生化学第2)のご挨拶の後、宴が催された。鋸南町から来賓として、例年どおり鋸南町長、助役、収入役の三名が出席され、「多くの学生、OB、職員が勝山寮を利用し千葉大学医学部の寮が繁栄してほしい」という旨のご挨拶をいただいた。また、地元の鈴木木工店の社長には、「おやじの代に千葉大学医学部にあった実験室を解体し、勝山まで海路を運搬し、部屋を継ぎ足して復元し、現在の中庭を囲む形の寮ができた」というお話を披露していただいた。宴の最後に、藤村教授から勝山寮の改修計画案について説明があった。また、青木謹先生より勝山寮の70周年を記念して、千葉市でOB会を開催し、日ごろより疎遠になっているOBと旧交を暖めたいという提案があった。今回開寮式に出席したのは、医学部から顧問の藤村真示教授(昭35)、岡本忠光事務局長、君塚直樹専門職員(学生生活担当)、地元から富永純鋸南町長、出口實助役、佐久間常夫収入役、佐伯陳哉先

生(昭35)、鈴木木工店の鈴木義康様、福原好男様、OBは青木謹(昭36)、廣島健三(昭54)、後藤茂正(昭58)、石井伊知郎(昭59)、溝田淳(昭59)、学生は栃木直文(医学部5年生)、他四名である。

勝山寮70周年記念会

のお知らせ

日時 11月28日(土)

午後六時より

場所 京成ホテル

OBの皆様には出欠のご意向を伺う葉書をだします。転居先が不明などの理由で、葉書が届かなかったOBで出席していただける方は廣島(医学部肺研病理)までご連絡ください。

(廣島健三 記)



るのほな同窓会賞

受賞者の言葉

安村美博(昭26卒)



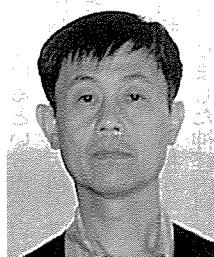
このたび、るのほな賞功労賞をいただき、誠にありがとうございました。感謝しております。こう書き出して余りにも挨拶文の書き方風で、我ながら年はとりたくない。誰に、何に感謝しているのか。

表彰式のあった6月13日は雨模様。栃木から千葉への電車の長旅は回想の時間をたっぷり与えてくれました。その日は太宰治の玉川上水入水の日です。何故か「葉」すじの自負」ふと彼の言葉が浮かびました。

5年前、定年の最終講義の際に配ったリーフレットのとびらに「オノコヤモタノシカラズヤ ヨロズヨニカタリツグベキ ナハタテズトモ (ヤマノシタノボクラ)」と記しました。その古希老残の私が賞を頂戴するのです。

金色燦然(たぶん天賞堂製)のるのほな賞牌にこう刻されています。「Vero

杉本和夫(昭46卒)



(ヴェーロ)細胞の樹立による微生物学・予防医学への貢献。15年前エッセイに私は書きました。「その名がエスペラントで真理を意味すること、エスペラントで緑の腎、Venda renoのアクロニムであることは知られていない。森の生活者ソローは言う。『真理を宣べるにはふたり必要だ。ひとりでは語るが、それを聞き入れるもうひとりがないければ』と。Vero細胞は幸運にも全世界に広がり利用されている。新しい可能性を見出してくれる研究者たちがいたことのおかげだった」。

言うまでもなく、この研究者たちのトップバッターであった同門の清水文七・前教授にこそ私の心からの感謝を捧げなければならぬ。(cf. 清水文七・ウィルスがわかる、講談社ブルーバックス)。ペロ毒素(エスペラントの名譽のため、ヴェーロ毒素と呼んでほしい)の名の由来で知られるのも私のせいではない。ひとさまのおかげ。

この度、榮譽ある功労賞を頂きまして、身に余る光栄に存じます。私は昭和53年から当時恩師久保教授が顧問をなさっていた千葉市立病院に勤めさせていたにしております。長年同じ病院で臨床を重ねていく中で、偶然にもM.R.S.Aが関与する伝染性膿痂疹の患者さんにインジン消毒液を塗布して治療できた経験から、アトピー性皮膚炎の患者から高率に検出されるブドウ球菌に着目し、一般的治療に消毒療法を併用したところ、短期間での皮疹の改善を得ました。消毒回数や消毒時間を厳守すればほとんどの症例で有効で、今では一般的に広く認められるようになりました。また皮膚の改善ばかりでなくアレルギー学的検査値の改善も顕著であり、その改善の根拠の解明を試みました。すなわちアトピー性皮膚炎の皮疹や臨床症状の短期間での改善に伴いIgE(抗体価)やアレルギー抗体の顕著な改善を経験しました。この事実の背

景にブドウ球菌が産生する毒素に対する特異的抗体価が皮疹改善と相関する成績を得ました。なお当院の内科の先生に、7例の協力者の十二指腸生検をしていただき、全例に十二指腸炎を認め、そのうち3例は慢性十二指腸炎を認めました。また兵庫医大の香川先生にお願いし、PCR法を用いてブドウ球菌が放出する毒素を測定していただきました。この消毒療法で皮膚のブドウ球菌が産生する毒素の減少に伴い腸管の炎症が改善し、食物抗原の経腸管感作が軽減し劇的なアレルギー学的諸検査値の改善を得たものと考えました。

私のような若輩者に功労賞は大きすぎる賞ですが、悩めるアトピー性皮膚炎の患者さんの為に微力ながらこれからも尽くしていきたいとおもいます。ありがとうございます。

篠達 仁(昭54卒)



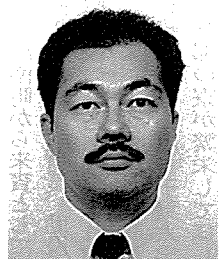
このたびは千葉大学医学部神経内科教授服部孝道先生のご推薦により、第3回

るのほな同窓会学術賞を受賞することができ心より感謝申し上げます。

さて、私たちの研究内容をご説明します。脳内コリン神経系は記憶や学習に関係すると考えられている神経伝達系であり、アルツハイマー病など痴呆性疾患では機能が低下していることが約20年前から報告されてきました。しかし、これまでの報告は剖検脳を用いた測定であり、コリン神経系機能を生体で測定する方法はありませんでした。今回私たちは脳内のアセチルコリンエステラーゼの活性をポジトロン断層撮影法(PET)で測定する方法(放射性薬剤および動態解析法を開発し、PETによりアルツハイマー病、パーキンソン病、進行性核上性麻痺という痴呆性疾患の病態の相違を明らかにしました。この方法は単に痴呆性疾患の病態研究というだけではなく、痴呆性疾患の早期診断、鑑別診断、病状の評価に有用であろうと考えています。

この研究は6人のグループで行ったもので、私のほか千葉がんセンター脳神経外科医長難波宏樹、浜松医科大学精神科助教授伊豫雅臣、放射線医学総合研究所(以下放医研)主任研究官入江俊章、福士清、第一化学薬品(株)東海研究所主任研究員長塚伸一郎の共同研究です。このうち3人はるのほな同窓会会員であり、放医研と千葉大学との共同研究といってもよいと思います。私自身は一九八三年から放医研に出入りするようになり、当時、臨床研究部の部長であられた館野之男先生のご指導のもとで、PETを用いた脳の神経伝達物質の研究に従事するようになりました。以来15年間にわたり放医研との共同研究を進め、今回のような成果を収めることができました。新規の放射性薬剤を開発し、人体に投与するまでには長い長い過程があり、多くの方々のご支援を受けました。この場を借りてご支援をいただいた方々に感謝の意を表したいと思えます。

大野博司(昭58卒)



このたびは、るのほな同窓会学術賞をいただき、心より感謝申し上げます。

私は昭和58年に本学医学部を卒業し、麻酔学教室にて4年間の臨床研修の後、昭和62年本学大学院医学研究科に入学し、医学部附属高次機能制御研究センター免疫機能分野(当時)の谷口克教授の門をたたきました。そこで、当時助手であった斎藤隆先生(現在は私の所属する遺伝子制御学の教授)に師事することになりました。

平成3年大学院卒業後も助手として斎藤教授の元に残り、一貫してTリンパ球の分化・活性化機構を研究してきました。その過程で、T細胞抗原受容体複合体の形成および細胞内輸送機構に興味を持ち、平成6年米国NIH留学を機に、選択的細胞内蛋白輸送の研究に本格的に取り組むことに致しました。

細胞が正常に機能するためには、蛋白質が各細胞内小器官に正しく運ばなければならないなりません。正常な蛋白輸送の障害は種々の遺伝病の原因となります。またウイルスなどの細胞内寄生体には、侵入に際し宿主細胞の輸送系を利用するものがあること、さらには種のウイルスでは宿主の正常な蛋白輸送を妨げることで、免疫系から逃れるこ

とから、細胞内蛋白質輸送の研究は、基本的な細胞制御の研究であると同時に、種々の病態を理解し、その治療法の確立にも繋がる研究領域です。平成9年帰国後も齋藤教授のご理解を得て、今回の受賞の対象となりました。選択的細胞内蛋白質輸送の仕事が続いております。麻酔科入局から現在に至るまでを振り返ってみますと、同窓会の諸先輩方のご指導、ご援助、またご助言なしには現在の私はあり得ません。今回の受賞を励みに、一層の努力を重ねる所存ですので、今後ともご指導ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

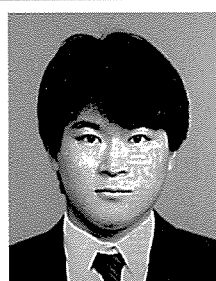


磯野史朗 (昭59卒)

一九九八年ゐのはな同窓会学術賞をいただき、大変うれしく、また、名誉に思っております。今回の賞は、私個人がいたくことになりましたが、私のこの研究を進めるにあたり、西野教授をはじめとする麻酔科同門の田中・宇津木先生など名前を申し上げきれないほ

どたくさんの方々のお世話になりました。この場をお借りして深く感謝の意を表したいと思っております。この研究を始めるにあたり呼吸器内科の栗山教授・第2生理学者の福田教授には好意的な励ましをいただきました。耳鼻咽喉科の今野教授・嶋田先生は、睡眠時無呼吸に対する手術適応患者の選択に関する共同研究の依頼を快く引き受け、積極的に参加協力していただいております。また、歯科口腔外科の丹沢教授・加藤先生たちとの歯科装具による睡眠時無呼吸症の治療に関する共同研究もようやく実を結ぶうとしております。さらに、脳神経外科の佐伯助教授とのAcromegalyと睡眠時無呼吸に関する研究も一段落し新しい局面を迎えようとしております。海外では、Johns-Hopkins大学Schwab氏助教授との上気道閉塞に対する新しい治療法開発の共同研究は、麻酔科田垣内先生の留学という形で進行中です。私の古巣であるCalgary大学Remmels教授とは、私の留学中にできなかった研究への再挑戦という形で始まろうとしています。また、耳鼻科嶋田先生の小児睡眠時無呼吸に関する研究が認められた為か、

Children's Hospital of Wisconsinとの共同研究も始まることになりました。このように、私の研究は、ほとんどが、共同研究で、私個人では到底できない研究ですが、今回は賞金を有効に使わせていただくため、私個人でいただくことと致しました。睡眠時無呼吸症の病態は複雑で、事実、多科にまたがる検査治療が必要な疾患であり、ゆえに、到底この疾患とは縁のないと思われる麻酔科的なアプローチが、今まで光の当たらない部分に光を与えることになる、今までもまたこれからも信じてこの研究を続ける所存であります。



赤坂 武 (平3卒)

このたびは、ゐのはな同窓会賞を受賞することができ、心より感謝いたします。私は、平成3年に千葉大学医学部を卒業後、故稲垣義明教授の教えをいただき、医療人としての第一歩踏み出しました。当時は、世界的にも循環器病学は分子レベルでの解析がほとんどな

されていなかったのが現状でした。ヒトが分子から構成されている以上循環器だけ分子レベルでの解析が遅れる理由はなく、今後は臨床医としても必須の知識となるはずという稲垣先生の助言から、高次機能制御研究センターの谷口克教授のもとで、基礎研究を始めることができました。教室では、転写因子の解析という、なかでも最も基礎的な内容の研究に従事しました。基礎的な内容である故、ともすれば実験のための研究になりがちでしたが、常に生物学的意味を考え臨床に還元できる研究をめざすという研究室の雰囲気から、今回のゐのはな同窓会賞に結びつく研究が可能となったものと思えます。この間に、ドイツMax-Planck研究所でマウスの遺伝学を学ぶ機会があり、方法論としてもよりいっそう、生物個体を相手に研究する幅が増えたと思えます。マウスを扱うことで、単なる化学反応ではなく生体反応を扱っているという意識は常にあり、臨床への応用も考える機会が持てました。今回の受賞を機会にこれまでの研究生生活を思い返してみますと、現在の研究グループの様に少人数では、できることは

限られてしまうのですが、本当に多くの先生方、特に同窓会の先生方にはお世話になることができたため、決して一人ではなし得ない多くの成果が挙げられてきたと思えます。これから人との出会いを大切にして充実した研究生生活を送りたいと思いますので、よろしくご指導、ご鞭撻の程をお願いいたします。

病院勤務医師名簿
国保君津中央病院

- 病院長 北方 勇輔 (昭35)
副院長 福山 悦男 (昭36)
片海 七郎 (東邦昭40)
佐藤行一郎 (信州昭42)
佐藤局長 佐藤行一郎 (横市大昭43)
磯部 勝見 (昭49)
田中 正 (昭50)
鈴木 紀彰 (昭50)
地域医療C副センター長 森 博通 (昭40)
田中 寿一 (昭43)
佐藤行一郎 (前出) 呼吸器内科
磯部 勝見 (前出) 脳外科
鈴木 紀彰 (前出) 伝染病
森 博通 (前出) 病理検査
桜井 渉 (昭55) 消化器内科
高橋 伸佳 (鹿大昭57) 消化器内科
篠崎 俊秀 (昭57) 呼吸器内科
山本 恭平 (昭57) 呼吸器内科
永井 敏雄 (昭60) 循環器内科

- 齊藤 博文 (昭63) 肝内
駒 嘉宏 (山形平2) 肝内病棟
佐野 剛一 (金沢平3) 肝内病棟
土屋 俊一 (金沢昭51) 外科
海保 隆 (昭57) 消化器外科
柳沢 真司 (昭60) 消化器外科
竹内 修 (東海昭61) 消化器外科
山口 敏広 (北里昭54) 心血管外科
阿部 弘幸 (徳島昭58) 心臓外科
深沢 敏男 (昭57) 呼吸器内科
田島 和幸 (昭58) 小児科
皆川 真規 (平1) 小児科
大曾根義輝 (昭62) 新生児
村松 俊範 (昭61) 小児科
岡田 忠雄 (高知昭63) 小児科
豊根 知明 (昭60) 整形外科
加藤 大介 (昭62) リハビリ
金山 竜次 (昭63) 整形外科
須田 純夫 (昭52) 小児科
岡 陽一 (昭56) 脳外科
島谷 博英 (昭57) 脳外科
高橋 秀禎 (昭44) 公衆衛生
遠藤 博久 (昭61) 放射線
平田 貴 (昭59) 放射線
酒井 光弘 (平3) 放射線病棟
高橋 容子 (昭44) 皮膚科
永嶋 薫 (昭56) 泌尿科
渡部 良夫 (昭63) 産婦人科
新井 一夫 (昭36) 産婦人科
神山 正明 (昭46) 産婦人科
木村 博昭 (滋賀昭58) 産婦人科
畔上 譲 (平1) 眼科
伊藤 知里 (北里平3) 眼科
金沢 春幸 (日大昭51) 眼科副
齋藤 敏雄 (昭60) 循環器内科

- 古谷 隆則 (東日本昭63) 歯科
野村 明 (愛媛昭60) 歯科
近 新平 (昭62) 麻酔科
今井 美絵 (昭62) 麻酔科
上野 博一 (東邦平3) 救急集中治療
医員 ○中の数字は卒業年
藤本善英 (昭55) 赤羽千穂 (昭60)
宮内秀行 (昭57) 奥富善之 (昭57)
山田修司 (昭57) 福田吉宏 (昭59)
保谷好絵 (昭58) 清水治子 (昭58)
田村大介 (昭58) 清水治子 (昭58)
田村英彦 (昭58) 清水治子 (昭58)
小児科 谷嶋紀行 (昭61) 清水治子 (昭58)
小児科 染谷知宏 (昭61) 清水治子 (昭58)
古谷貴子 (昭61) 清水治子 (昭58)
黒沢孝一 (昭57) 東 浩二 (昭59)
新生児科 久保田博昭 (昭44) 末吉智博 (昭55)
寺岡菜穂子 (昭44) 末吉智博 (昭55)
整形外科 江 東女医 (昭56)
脳神経外科 早坂典洋 (昭56) 山形 (昭56)
坂田義則 (昭56) 山形 (昭56)
皮膚科 今倉樹里子 (昭56) 日大 (昭56)
産婦人科 木原真紀 (昭56) 日大 (昭56)
眼科 鈴木美佳 (東女医 (昭56)
耳鼻科 鈴木一雅 (昭56) 高橋俊之 (昭57)
大谷聡 (昭57) 高橋俊之 (昭57)
麻酔科 清水国 (昭57) 高橋俊之 (昭57)
救急集中治療科 平野 剛 (昭58) 森口武史 (昭59)

教室だより

解剖学第一講座 (細胞生物学)

教授 嶋田 裕 (昭35卒)

当講座は、小池敬事、草間敏夫、福山右門の各教授により主宰されたところで、私で第4代目になります。

現在、学部教育は肉眼解剖学と発生学、大学院専攻科目は細胞生物学を担当しております。

肉眼解剖学では、個々の名称も然ることながら、高等脊椎動物構築の原理原則を知るところを重点に、破格の存在 (人体の多様性) も認識させます。実習では技能の熟練、観察力、問題解決能力が要求されます。実習に提供されるご遺体は、すべてドネーション (献体) によっており、実習を通じて学生はボランティアの精神を学び、また人の尊厳や生と死についても考える機会が与えられるなど、人体を用いた実習の教育効果は大きいと考えられます。最近、コンピュータによる画像には格段の進歩がみられ、教育の有力な補助手段になってきています。

発生学では細胞生物学や分子生物学に関する最近の知見を取り入れ、形態形成

現在、研究室には、ミャンマー、パキスタン、パングラデッシュ、中国などからの外国人研究者および大学院生が居り、熱心に研究に取り組んでいる姿が見られます。日常の交流には英語を用いており、日本人大学院生のコミュニケーション力の向上に役立ちます。

一昨年には国際シンポジウム「筋線維形成の分子

附属病院病理部について

(国立大学医学部附属病院 病理部連絡会に出席して)

附属病院病理部部長 中野雅行 (昭45卒)

病理学教室は基礎医学講座の一つと考える人が殆どではないであろうか。病理医でもそう思っている人が少なくないのではないかと、思うことが多い。こう言う私も病理部に席を置くまで病理学の中の診断病理学が独立した専門分野であり、病院の中で臨床と直結した重要な部分であると実感したことはなかったというのが実情である。しかし、現在在病理部に責任者として赴任し様々な問題に直面し診断病理学部門の人的、物的独立の必要性を痛感している。数回の国立大学医学部附属病院病理部連絡会に出席して各大学各様の病理

機構」を本学けやき会館において主催し、好評を得ました。また現在、医学生物学・理工学・機器メーカーの会員から構成される日本電子顕微鏡学会の第43回シンポジウム開催を仰せつかっており、「21世紀に向けての新技术の展開」をテーマに、今年10月下旬開催に向けて準備中です。

病理学は病気の基礎を明らかにし、病状がようやく分かってきたので紹介させていただく。医療における病理学の位置づけ。病理学は病気の基礎を明らかにし、病状がようやく分かってきたので紹介させていただく。医療における病理学の位置づけ。病理学は病気の基礎を明らかにし、病状がようやく分かってきたので紹介させていただく。医療における病理学の位置づけ。

で広く発展してきた。『人体病理学』に基づく「医療への実践の使命」を持ち、病理学が専門職となるまでは病理学とくに人体病理学は「臨床の一部」と見なされ機能していた。その後、病理学が病態解明の手段として基礎生物学研究が取り込んだ専門分野として分化してくるに従って病理学の中に、臨床と独立した領域が生ずるに至った。

特に近年では分子生物学的手法による研究が先端科学的、近代的とされ、従来の純形態学的手法は時代遅れと見なされる傾向にある。一方において臨床と直結した病理学、病理形態学、診断病理学も飛躍的な発展と拡大を示し臨床医学に積極的な貢献をする時代となった。手術・生検材料を対象に、個々の病気の病理学的「診断確定」、治療方針の決定、治療効果の評価などを通じて「医療の重要な部分に参画」している。病理組織診断は厚生省も認める立派な「医行為」であるがまだ一般的に認識されていくわけではない。

ことができる。これらの業務を行う病理部門の病院における組織機構は病理部となっている。病理部は患者に直接触れて病気の診断を下すことにはないが、患者の臓器組織を病理学的に診断することによって診療に直接参画している。すなわち診療科として医療の本質に関わる重要な業務・機能を担っている。

卒前における診断病理学教育。学部学生に臨床医学の基礎となる基本的知識を正しく把握させること、疾患の本態の理解および問題点を解決していく思考過程を育成する必要がある。疾患や病名の多くが病理学的知識を基盤として名付けられているので、疾病や病態の本質および疾病や全身の現象として理解するために病理学は最適の学問である。しかし、現状では病因論や疾病の形態像に重点を置きすぎた病理学教育がなされ、臨床医学の理解を助ける教育が効率的に行われていないと断言したい。さらに、病院病理業務は明らかに臨床医学の一分野であるが、日本では病理学は明治以来基礎医学に組み込まれてきたために、このように医療に直結する人体病理学の教育がおろそかにされてきた

ことは否めない。診断病理学講座の必要性。『人体病理学』、『診断病理学』を医学部内で完全な機構とするには、上述した病院病理業務と学部学生の教育を行うに足る人員が必要である。現状では病理部の定員は助教授一人である。病理医、部長、学部学生の教官、臨床医への病理組織学的支援各種サービス等ひ

と何役もこなしている状態である。本来これらの事務を余裕を持って行うにはそれだけの人員が必要であり、いわゆる臨床科と同様な機構 (医学部の講座、病棟の臨床科) とする必要がある。すなわち、医学部における人体病理学講座あるいは診断病理学講座、そして病院における病理部 (病理科) という表裏一体の機構を形成することが必要である。病理部に関する文部省の考えは病理部が未設の国立大学 (医学部) があるかぎり、新設に全力を注ぎ、既設の病理部の整備 (病理部の人員整備、診断病理学講座の新設) へ手がまわせないのが現状である。しかし、現場では診断病理学講座を作っている (京大、東大、東北大)。千葉大は病理部設置では後発であったが、診断病理学講座では先

進であってほしいものである。千葉大学医学部は大学院大学を目指している。医学部病理学講座が基礎医学に専念するためにも、病院の診療体制の万全を期するためにも診断病理学を専門とする診断病理学講座の整備を要望するものである。

八千会 四十七周年

医専26卒



平成十年度のクラス会、八千会が5月16日佐世保市在住の原寛君が幹事としてハウステンボス入園ゲート前、JR全日空ホテル内、和食、雲海で開催された。出席は同伴の夫人3名を含む13名、出席を楽しみにされていた大田和明総務幹事と他2名が突然の体調不良の為、直前キャンセルとなり誠に残念であったが殆ど

この文章が病理学ならびに病理部の理解の一助になれば幸いである。(医療における病理学の位置づけ、病院病理部業務、卒前における診断病理学教育は「医療における病理学の役割」日本病理学会、平成元年8月から抜粋、加筆した)

古希を越えた会員としては、やむをえない事ではあった。物語者の黙禱に始まる総会次第も滞り無く終り、長野の今井良夫君の乾杯発声で懇親会に移る、夫人同伴で今回の接待に尽くされた原幹事差入れの地元の美酒に酔い各自近況報告がなされ、それを肴に更に盛り上がり、楽しいひとときを過ごした。

引き続きハウステンボスの夜景も美しい最上階のスカイラウンジで二次会が行われ更に旧交を暖めあう。翌、17日天気にも恵まれ8時30分頃貸し切りバスで九十九島観光に出発する。(12名) 佐世保港湾岸を抜け、まず展覧館なる展望台に登り全景を俯瞰する。点在する緑に覆われた大小の島々、遠くに霞み入り組ん

だ岬の数々しばしばその雄大なパノラマ図に感嘆する。原寛君の説明に耳を傾けながら互いにシャッターを押し合い、ひとときを過ごす。観光船乗船までに時間があつた為、下山長崎市内に戻り日本海軍の歴史を展示する海上自衛隊史料館を見学する、海軍創設者勝海舟に始まり戦艦大和の沈没その終焉迄、戦時青春を送った我々にとって興味ぶかく又、胸に来るものがあった。11時、カラフルな帆船に乗り島めぐりとなる、松の緑に覆われ所々奇岩の露出

する大小の島々、間を縫って船は進む。デッキで心地よい潮風に吹かれながら日常の憂さを払拭する。約五十分の行程で下船、船着き場近くのイタリアンレストランで昼食となる、雑談しながらの冷たいビールとパスタ、生地の薄いパリパしたピザが大変美味しかった。これで一応日程は終了したが、夕刻の長崎空港出航迄時間があるとのこと、帰路わざわざ、弓張岳展望台を回って頂き今一度眺望を楽しみ、そのまま貸し切りバスで空港に向かう。ホテルにもう一泊の者、新幹線の者もあり途中途中で別れを惜しみつつ再会を約して散会していった。

総じて、メルヘンチックなハウステンボスと展開する九十九島を含む眺望と、その対比において、すばらしい二日間のクラス会でした。出席者 今井良夫、大沢弘和、菊島竹丸、和子夫妻、小関芳昌、佐藤宏、鷹野悦三、中島正純、通子夫妻、原寛 温子夫妻、藤江良雄、森巨敬(敬称略) 大沢弘和 記

昭和33年卒同窓会



卒後40周年の記念すべき同窓会が、3月に富山医薬大を定年退官した辻陽雄君の肝いりで、6月6日(土)富山市で開催された。

富山市を一望する呉羽ハイツの露天風呂で、かく暇も無かったほどの旅の汗を流した後、宴会場に臨んだ。久闊を叙しながらの近況報告も、野次と笑いに阻まれなかなか進行せず、楽しい宴だった。各自の部屋に引き上げてからも、語り合いは深更にまで及んだ。

翌日は県立美術館で東山魁夷展を鑑賞した後、白川郷から移築した合掌造りのそば処で会食し、自由解散となった。出席者は夫人同伴の今留淳・柏戸正英・椎名益男・

安房のな会

平成10年4月17日(金)

安房のな会(会長 野原宏)が、館山市夕日海岸ホテルに、千葉大学医学部耳鼻咽喉科今野昭義教授(昭36)をお迎えして開催された。『鼻アレルギーの病態と治療』と題した講演につき、セミナー形式の授業の採用、学位論文の英文化、最近の太字の様子を伺った後、懇親会となった。今回の特徴は、安房医師会病院の医師が上村先生以下5名も参加された事で、青木新医師会長の安房医師会病院院長としての意気込みが深く感じられた。

表彰

日医最高優功賞

渡辺 武(昭27)

松石 久義(昭33)

日医優功賞

栗原 伸夫(昭38)

放射線安全管理功労者

科学技術庁長官表彰

北方 勇輔氏(昭35)

国民健康保険関係功績者

厚生大臣表彰

福山 悦男氏(昭36)

千葉県知事表彰

片海 七郎(東邦昭40)

訂正とお詫び

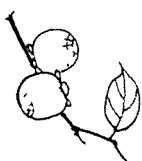
117号で、左記の方々の氏名に誤りがありました。訂正し、お詫び申し上げます。

安達恵美子教授

↓ 安達恵美子教授

伴賀多朗夫妻

↓ 伊賀多朗夫妻



訃報

本学名誉教授・解剖学第一講座 福山 右門 殿(88才)は、病氣療養中とのところ10月2日(金)午後4時36分ご逝去されました。なお、ご遺体は本学に献体されました。葬儀等はご遺骨が返還されたのちに(明年夏以降)に執り行われる予定です。

千葉労災病院医師名簿

平成10年7月1日現在

病院長

高橋 英世(32)

副院長

石原 運雄(昭36)

部

鈴木 秀(昭43)

鈴木 秀(昭43)

石原 運雄(昭36)

鈴木 秀(昭43)

鈴木 秀(昭43)

鈴木 秀(昭43)

鈴木 秀(昭43)

鈴木 秀(昭43)

鈴木 秀(昭43)

鈴木 秀(昭43)

鈴木 秀(昭43)

鈴木 秀(昭43)

鈴木 秀(昭43)

鈴木 秀(昭43)

鈴木 秀(昭43)

鈴木 秀(昭43)

鈴木 秀(昭43)

鈴木 秀(昭43)

鈴木 秀(昭43)

鈴木 秀(昭43)

鈴木 秀(昭43)

鈴木 秀(昭43)

鈴木 秀(昭43)

鈴木 秀(昭43)

鈴木 秀(昭43)

鈴木 秀(昭43)

鈴木 秀(昭43)

鈴木 秀(昭43)

鈴木 秀(昭43)

鈴木 秀(昭43)

高橋 淳一(昭41)

小林 紘一(昭42)

雄賀多 聡(昭55)

渡邊 攻(昭40)

由佐 俊和(昭51)

小池 洋一(昭54)

柳 重行(昭50)

遠藤 信夫(昭48)

石毛 英男(昭53)

林崎 勝武(昭44)

今野 曉男(昭39)

岡田智志穂(東京女子大・昭43)

浅野 秀文(昭59)

中村 哲雄(昭49)

伊藤 一郎(群馬大・昭47)

山本 司(昭58)

志賀 孝(平9)

根津 櫻子(平3)

押田 正規(昭62)

金田 庸一(昭61)

山下 桂志(平5)

高野 浩昌(昭63)

桜井 康良(平1)

野瀬 晴彦(昭60)

上 郁男(滋賀大・昭53)

齊藤 公男(弘前大・昭60)

清水 耕(昭59)

小沢 義典(昭57)

秋元 英里(昭62)

角南 滋子(鳥取大・昭57)

馬橋 敏紀(城西大・昭57)

田中 武継(滋賀大・昭59)

志賀 孝(平9)

根津 櫻子(平3)

押田 正規(昭62)

金田 庸一(昭61)

山下 桂志(平5)

高野 浩昌(昭63)

嘱託

荻田 文武(横浜市大・平6)

菅原 恒美(東京女子大・平8)

星野 直(京都大・平8)

松本 圭介(平8)

青木 重陽(平3)

南出 雅弘(山形大・昭63)

小倉 孝一(平8)

柿沼 健裕(平8)

矢島 健司(聖マリ大・平7)

木村 浩(平7)

松原 宙(岩手大・平9)

新妻ゆり子(平9)

沼田 理(平9)

笠松 恒司(弘前大・平8)

吉田 明(昭17)

三浦 寛(昭17)

茅根 一郎(昭17)

梅澤 勉(昭17)

内田 成和(昭17)

岡部 弘(東医昭16)

別所 一男(昭16)

矢田 晴次(日歯14)

伊藤 清夫(昭13)

村上 實(昭12)

鈴木 敏(昭12)

兵藤 敏朗(日大昭10)

堀越 晴美(日大昭8)

松山 貫一(東大昭7)

久保田 稷(昭7)

梅津 馨(昭7)

大高 孝造(大10)

福山 右門(満医大昭10)

高嶋 克己(大9)

池田 博(昭18)

三橋 政信(昭19)

山田 正哉(日大20)

大村 忠夫(昭21)

松村 起男(昭21)

坂本 泉(昭23)

荻野 正之(昭23)

小林 弘(昭24)

千葉県・地区医師会長

(平成10年4月1日より)

鎌ヶ谷・畑 徹・昭25

夷隅・森川二郎・昭25

市原・内田威郎・昭32

長生・武田從信・昭33

海上・高木良章・昭34

安房・青木 謹・昭36

国立・横山健郎・昭36

山武・伊藤俊夫・昭36

八千代・杉岡昌明・昭37

匝瑳・藤田栄一・昭37

習志野・梶本伸一・昭39

松戸・武井孝達・昭41

君津・中村和成・昭41

銚子・片倉 透・昭42

大学・守屋秀繁・昭42

国保松戸市立病院

人事異動

香西 襄(昭38) 副院長

(副院長兼診療局長)

藤塚光慶(昭43) 診療局長

(整形外科部長より)

丹野隆明(昭57)

整形外科部長(医員より)

池田 博(昭18)

三橋 政信(昭19)

山田 正哉(日大20)

大村 忠夫(昭21)

松村 起男(昭21)

坂本 泉(昭23)

荻野 正之(昭23)

小林 弘(昭24)

石躍 文夫(昭25)

小澤 仁一(昭25)

高尾 敏(昭25)

岩津 英雄(昭26)

伊藤 彰時(昭26)

橋本 正英(昭40)

吉野 隆己(昭44)

村山 和子(昭46)

難波 真美(昭54)

君津・中村和成・昭41

銚子・片倉 透・昭42

大学・守屋秀繁・昭42

国保松戸市立病院

人事異動

香西 襄(昭38) 副院長

(副院長兼診療局長)

藤塚光慶(昭43) 診療局長

(整形外科部長より)

丹野隆明(昭57)

整形外科部長(医員より)

池田 博(昭18)

三橋 政信(昭19)

山田 正哉(日大20)

大村 忠夫(昭21)

松村 起男(昭21)

坂本 泉(昭23)

荻野 正之(昭23)

小林 弘(昭24)

石躍 文夫(昭25)

小澤 仁一(昭25)

高尾 敏(昭25)

岩津 英雄(昭26)

伊藤 彰時(昭26)

橋本 正英(昭40)

吉野 隆己(昭44)

村山 和子(昭46)

難波 真美(昭54)

池田 博(昭18)

三橋 政信(昭19)

山田 正哉(日大20)

大村 忠夫(昭21)

松村 起男(昭21)

坂本 泉(昭23)

荻野 正之(昭23)

小林 弘(昭24)

石躍 文夫(昭25)

小澤 仁一(昭25)

高尾 敏(昭25)

岩津 英雄(昭26)

平成10年度
春叙勲

前田 實(昭22) 勲三等瑞宝章

唐木 清一(昭28) 勲三等瑞宝章

関 正利(昭28) 勲四等旭日小綬章

稲田 正實(昭25) 勲四等瑞宝章

川邊 敏(昭18) 勲五等双光旭日章

佐々木芳岡(昭19) 勲五等双光旭日章

川村 純一(昭25) 勲五等瑞宝章

編集後記

今回は、最近の投稿原稿数の増大と郵送費節約の為に年3回発送という制約を考慮し、118号と119号の同時発行にしました。従って、本号のようなタブロイド版に改編されてから、いよいよ120号を迎えようとしております。

この会報の発行は、学生主体によるものから出発したと伝え聞きます。その戦後まもなくからの発行から年を数えると、半世紀になろうとしているわけです。自身の歴史も、き時期と考えると、去り発行された会報など、散逸した資料が多々あります。現在それら収集中です。会員諸氏のご協力をお願いする次第です。(鈴木信夫・昭47)